

---

# レーマン教授の不思議なお話し。

影法師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レーマン教授の不思議なお話。

### 【著者名】

影法師

Z5542D

### 【あらすじ】

レーマン教授の研究所に足を運ぶ琢磨。いつものように話しかけにきたようだ。今日はどんなはなしをするのかな?

## レーマン教授の不思議なお話～優希のお話～

「やあ、また君かい？」

「だつてひまなんだもん」

学校なんてつまんないし、家にかえつてもやることがない。ゲームも飽きたし、マンガなんて数えきれないほどよんだ。やるけどといったらつまらないテレビをだらだらみるだけ。それだつたら教授の話を聞いていたほうが100倍ましだし。

とこうわけで今日も僕こと田中琢磨は教授の研究所に来た。教授はいつも研究所でなにやら難しいことをしている。

「教授うー、今日もなんかお話ししてよお」

「うへん・・・。毎日違つ話しばかりしていると、こいつちもネタがつかむんだけどな。・・・。うだつ、ある少年の話ををしてあげよう」

教授はなにかを思い出すかのように右上に視線を置いた。

ちなみに教授はかなり若い。・・・と思つ。なんせ年を聞いてもはぐらかされたり、流されて結局わからずじまいになつてしまつた。教授の助手に教授の年を聞いてみたが助手もわからないみたいだった。しかし、史上最年少でなんかの博士号をとつたところを聞けただけでも大きな収入だった。

「うんっ、してして！」

僕はそう促すと、教授は教授がいつも僕に話を聞かすときのあの  
独特な雰囲気の空間を作り上げた。

ふわーんというか、落ち着くというか、まあとにかく僕はこの雰囲  
気がとても好きだった。

教授は視線を僕に戻すと、静かに語り始めた。

ある少年がいました。その少年は自分が大嫌いでした。自分のなに  
からなにまで嫌いで、もう本当に嫌いで嫌いで仕方がありませんで  
した。

「やあ、ゆう坊。また今日も一人ぼっちかい？」

少年の名は優希。女らしい名前ですが、れっきとした男です。優希  
は自分の名前も嫌いでした。

「教授だつていつも一人ぼっちじゃん」

二人はお決まりの言葉を言い、沈黙。

もともとあまりおしゃべりなほうではない一人はすぐにこのよくな  
沈黙になってしまっています。

教授が先に口を開きました。

「ゆう坊は自分のどこが嫌いなんだい？」

「全てだよ」

「そんなに自分が嫌いなのに、自殺とかは考えないの？」

「もちろん」

「なんで考へないの？」

そう疑問を振りかけると優希は当たり前のようになり、言いました。

「自殺するひとは自分が大好きだからだよ。」

「…………？。なんで自殺する人は自分のことが好きってわかったの？」

「だつて自殺は現実逃避の頂点じゃん。嫌な現実から逃げ出す行為が自殺でしょ？嫌な現実つてのは必ず自分が主体となつて初めて現れるんだ。自分が傷つくのが嫌だから逃げ出す。つてのが現実逃避でしょ？ それって自分が好きな証拠じゃん。 結局自分が可愛いから、逃げるんじゃん」

ゆう坊は自分が嫌いでした。今も嫌いです。そしてこれからも・・・

「はい、これでおしまい。」

「よくわからなかつたし、つまんないよ

教授の話しあはいつもこんなかんじで終わる。全然面白くないし、よくわからないことが多いほとんどだ。  
そして話しが終わると、教授は必ずいつ言つんだ。

「まあ、そのうちわかるや。」

そのあと必ず僕はいつ言つて。

「また来ていい?」

そしたら教授は必ずいつ返す。

「ああ、こいつでもおいで。研究所は君を待つてるよ

## レーマン教授の不思議なお話し ～太郎のお話～

午後4時20分。

いつもこの時間に琢磨はこの研究所のドアを叩く。

トントン

ほらね。どうぞ、と僕は促すと、予想通り琢磨 田中琢磨 がどかどかと入ってきて、そのあと遠慮がちにこちらへ歩いてくる。どうしたんだろう？うしくない、と思つたすぐ後、原因なるものがわかつた。

今、僕が椅子に腰掛けている隣に、新しく入ってきた新入り研究員がいるのだ。おそらく、琢磨はこの新入り研究員に人見知りしているのだろう。

琢磨が人見知りの氣があるなんて、初めて知ったな。

琢磨は新入り研究員の立っている反対側に立ち、耳元で僕に囁いた。

「この人だれ？顔が怖いんだけど・・・・」

僕は思わず笑ってしまった。人見知りじゃなくて、ただ怖かつただけだったのか。まあ確かにこの新入りはコワモテタイプだ。それも無理はないな。

「」のままでは、琢磨と会話もままならないので、ひとまず新入り研究員を帰らした。  
「びひせ、役に立たないしね。

「今日もまた話しを聞きに来たのかい」

めんどくせうなふりをしながらそいつ尋ねた。

「だつて家にいたつてやることなこっし・・・・」

「テレビとかみればいいの？」

と、俺が呟くと、

「テレビより教授の話しを聞いた方がいい。」

とかわいこじ」とを言ひてくれる。

「しようがないな・・・・それじゃあ今日はある少年の話しをしよ  
う」

と言つて、僕は琢磨に限らず誰かに話を聞かすときの、僕特有の  
独特な空氣を作つた。

「そういえば前に、琢磨は『』の空氣が好きとか言つていたな。

ふと琢磨を見ると、わくわくしながら純粋な田で、僕の瞳を捉えている。

こんな田をされては焦らすことなんてできるはずもなく、僕は静かに口を開いた。

「太陽が海に落ちる」ふ、小さなジャングルジムの上で、少年は泣いていました。

僕はとりあえず名前を聞いてみることにしました。

「君はこの辺の子かな？名前はなんていつの？」僕がそう問い合わせみると、少年は涙を拭いて、こちらを向きました。

「僕の名前は村田太郎。僕の家はここから徒歩数分の所にあるよ。

教授は、次になんて泣いているかを聞きました。

「どうして泣いているの？」

「怖いから泣いているんだよ」

教授は太郎の落ち着きはらつた態度に驚きました。しかし、顔には出しませんでした。

「どうして怖いの」

「人が死んだんだ」

太郎の意外な発言に教授は驚きました。しかし、顔には出しませんでした。

「それは、誰かな」

教授は聞いた後後悔しました。もし太郎が今の発言でまた泣いてしまうかと思ったからです。しかし、太郎はそんなことはなく、威風堂々としました。

「知らない。ニュースで見たんだ」

「なんで、他人が死んだのに泣いているの」

「怖いからだよ」

意味が分からない。子供というものは抽象的に話すから詳しく聞か

ないとわからない。全く、面倒な生き物だ。と教授は改めて思いました。

「なにが怖いんだい」

「とりつかれるのが怖いんだよ。背後霊とかが怖いんだよ。」

「それが、死んだ人を見て泣いているのとなにか関係があるのかい？」

「僕は死んだ人が僕にとりつかないよう泣いてたんだよ。」

太郎はそう言いました。教授は、成程。そうゆうことだつたのか。と納得しました。でもなんで太郎は泣いたらとりつかれずに済むとおもつたのだろうか。という新たな疑問が生まれてきました。

「どうして泣いたら、憑かれいで済むと思ったんだい？」

教授が思つたことを口にすると、太郎は大人らしい表情で答えました。

「前に、友達に大切な宝物を壊されちゃつたんだ。そして僕が怒つたら、その友達は泣きながら僕に謝つたんだ。そしたら、急に怒る気が削がれちゃって、結局そのことは許したんだ。」

朝、ニュースを見て、交通事故で死んだ人がいたんだ。僕はそれを見て、

「バカだな」って言つたんだ。そしたら母さんに  
「そんなこと言つたら事故にあつた人にとりつかれちゃうよ」って  
言われたんだ。

それ聞いたら急に怖くなつて、どうすればとりつかれないかな。つ  
て考えたんだ。そしたら、あの友人のことを思い出して、泣いたら  
許してもらえる、とりつかれずに済むと思つたんだ。だから・・・

「

太郎はそう話した後、また泣き始めました。

嘘の涙は本当の涙より純粹なのがもしけない。・・・

・・・

「はいっ、おしまい。」

僕は話をやめ、独特な空気を解放した。

琢磨はよくわからなかつたのか、首をかしげたまま動かない。

「はい、もう話しさは終わつたんだから帰つた帰つた。」

僕は琢磨にしつこい、と手を振り、帰れとサイン。

「よくわからなかつたよ。」そう琢磨が言つと僕は決まり文句を言つ。

「まあ、そのうちわかるさ。」

そして、琢磨が決まり文句を言つ番。

「また来てもいい？」

「ああ、いつでもおいで。研究所は君を待つてゐるよ。」

## レーマン教授の不思議なお話～太郎のお話～（後書き）

いろいろ、illusがありました。  
一話よつはぬかにわかりづら  
と思われます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5542d/>

---

レーマン教授の不思議なお話し。

2011年1月5日14時25分発行